

# ユトピア

## 守 永 英 子

私の保育者生活も、今年で十五年になった。ベテランの保育者から見れば、「まだまだ」の年月であるし、学校を出たての若い保育者から見れば、「かなり」の長さの年月であろう。

その間、およそ、新しい風潮を追うことなく「独自の保育」を守ってきた私どもの園でも、保育の形態、内容、教材等、少しずつ変化してきている。

そして、それらの変化にもかかわらず、

ずっと変わらないで続いているもの……それは「ひとりひとりの子どもを大切にしようとする心」であるように思われる。

あるベテランの保育者が、次のようにいっているのを耳にしたことがある。

——「子どもに与える内容は、学級の平均より高めた方が、子どもたちがよく伸びます」

また、ある園長先生は、最近、小学校の体育の先生を招いて、体育の指導をしてもらっていると前置きして、「数種目やっていますが、皆ずいぶんいろいろなことができるようになってきました」と満足そうに話された。いずれも、熱心な経験豊かな保育者である。が、自身の保育感覚からは、あまりに遠いもののように感じられてならなかった。

ある技術の修得を目ざして学級全体に課題を与え、学級の何パーセントが期待した水準に到達したか……というような考え方を、今まであまりしたことがなかったように思う。

私の興味の中心は、A児であり、B児で

あり、C児であった。それぞれの幼児が、それぞれの活動の中から、何をどのように吸収し、自らの中にどのように実らせていっているか、ということであった。

ある園で、体育の指導の場面を見学したことがあったが、私の最大の関心は、どのような技術を、何人の幼児が修得しているか……ではなくて、一斉に指導されている場面で、できない子どもが、その経験をどのように受けとめているか、それはプラスの経験であろうか、ということであった。

教育は、数量ではかって終わらせてはならないものであると思う。たった一人の子どもも、切り捨てられてはならない。その子ども自身にとって、かけがえない自分自身なのであるから。

この十五年間、「ひとりひとりの子どもの成長を大切に」考えて、私なりに努力をしてきた。

新しい集団生活の出発点で、望ましい適応を示さなかった幼児、そして卒業のころには、周囲のおとなや友だちの善意

を信じて、素直に自分を表現できるようになってきた幼児の顔を、幾つとも思い浮かべることができる。子どもは正直である。「心」が変わると「顔」が変わる。

「とてもおだやかな顔になった」と他の組の先生も気づくほどに変わってくる。

三年保育児のA子は、『早くおべんとうにならない』といつてはおこつて部屋から出ていき、帰りに『先頭になれない』といつては、並ばずに、廊下に行き、がみこんでおこつていたが、卒業のころには、笑顔のよい、実にのびのびした子どもになっていた。前園長の坂元先生は、その三年間をじつと見ていてくださり、「あの子は、とてもよい子になりましたね」とおっしゃってくださった。現場の保育者にとって、これ以上の喜びはない。しかし、最後まですっきり心を開こうとしなかったB児、『課題意識』が十分育たず、小学校に行つても、かなり苦勞であつたらしいC児……と、申しわけない気持ちで思い出す顔もある。周囲の人たちから、あの子どもなりにはよくなつて

きたのだから」という慰めを受けはしたが、やはり、子ども自身にとっては、やり直しのできない、かけがえのない大切な時期であつた。自分の力の足りなかつたことを申しわけなく思う。

このような気持ちを、ひそかにいだいている保育者は私だけであろうか。このような問題は、体育の力を伸ばすために体育の先生を招き、絵の指導のために絵の専門家を招く……という保育の考え方の中では、解決できないように思える。

A児、B児、C児……と、それぞれの子どもに、今、最も必要なものは何か、を的確にとらえなければならぬ。保育は、そこから出発しなければならぬし、そのためにこそ、専門家の力を結集することが必要であると思う。

思うことの多さにくらべ、自分の力の足りなさをしみじみ思うとき、私は、このようなことを夢みる。——どこからも圧力のかからない、幼児教育研究センター——現場の必要から生まれたテーマで研究を委託され、資料を作つて提供し

たり、現場の保育者が、経験の中からとらえたテーマで、ある期間、そこで研究に従事したり、もちろん、未来のよりよき幼児教育の開発のために、センター独自の研究もなされ、また、現場で直面している特定の幼児の問題行動のためには、依頼を受けて相談員を派遣し、子どもの観察、必要なテスト、問題の分析など、解決のために協力する——そのような機関があると思うのは、私だけであろうか。

国連の事務総長であつた、スエーデンのハマーシヨルド氏がこの日記のなかに、次のような言葉が記されているところである。——人はたずねる。「ほかの人たちよりすぐれているでしょうか」と。私は答える。「なぜそうでなければならぬのか。君は君のなりうるものになつているか、それが大事なのだ」と。——私の保育に対する思いも、それに尽きる。「彼は彼のなりうるものになるべく、間違いなく、十分に成長しているだろうか」と。(お茶の水女子大学附属幼稚園)